

## 『裸でも生きる－25歳女性起業家の号泣戦記』

山口絵里子著／講談社

「大学を辞めてこの道に進みたい」と、私の部屋を学生が訪ねてくることがある。彼ら彼女らの目は本気だ。日々の仕事や家族サービスに忙殺されている私には輝いてさえ見える。やりたい事とことん貫いて成功して欲しいと思う。でも、子がいる私は親の気持ちにもなる。「後悔するぞ」「夢だけでは食べていけないぞ」「人生そんなに甘くないぞ」という言葉が喉まで出かかる。私が君たちと同じ年頃に親から言われた言葉だ。

やりたい事をやらずに後悔している人はたくさんいるだろう。私も多くの後悔を持っている。その一方で、果敢に挑戦しても報われず、失意のどん底に落ちた人もたくさんいるだろう。人生において成功と失敗の違いは何だろうか？

そんな事を出張中にふと思ひながら、新幹線の中でiPhoneで情熱大陸というテレビ番組を見ていた。そんな時「山口絵里子」という今まで聞いたことのなかった名前が目に飛び込んできた。そう、本書の著者である。彼女は25歳の時に、世界の最貧国の一つであるバングラデシュに単身乗り込み、特産である麻の一種「ジュート」を使ったバッグで、「発展途上国から世界に通用するブランドをつくる」という強い思いを胸に抱き会社を一人で立ち上げた。本書は、その時の泣き笑いのエピソードをつづったものである。何度もつまずき、何度も人に裏切られながら涙するも、自分の思いをかなえるために常に前を向く姿勢には心打たれすがすがしささえ感じる。

彼女が会社を立ち上げたきっかけは、「現地を知らない先進国の人々が、机上で開発計画を決めている」「今の援助の仕方では途上国は自立できない」など、先進国の途上国支援のやり方に疑問を感じたからだ。小さい時から国際問題に興味があったと思いきや、「小学生の時はいじめられっ子だった」「中学生の時は金髪で、万引きや喫煙で警察のお世話になっていた」らしい。社会企業家として働く現在の姿からは想像しがたい。

彼女の生き方からは、たとえどんな困難や孤独が待ち受けようとも、自分の気持ちに正直に生き、自身の責任において決断する姿勢がひしひしと伝わってくる。彼女は本書でこう述べている。「バングラデシュのみんなに比べて山ほど選択肢が広がっている私の人生の中、自分が彼らにできることはなんだろう。それは、ま

---

ず自分自身が信じる道を生きることだった。他人にどう言われようが、他人にどう評価されようが、たとえ裸になっても自分が信じた道を歩く」。人生の成功とは、何度挫折したとしても起き上がり、自分自身が決めた道を自分自身の責任で最後まで歩き続けることなのかもしれない。

だから、「大学を辞めてこの道に進みたい」と言ってきた学生には、チャレンジすることを勧める。しかし、「自分が入りたいと思って大学に入ったのでしょうか。それならやり抜くことが大事なのではないの」と語っている。今やるべき事を真摯に出来ない人間が成功できるとは到底思えないからだ。

## 執筆者紹介

高橋 祥司

環境・建設系准教授。専門領域は、分子生物学、応用生物化学。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『裸でも生きる：25歳女性起業家の号泣戦記』山口絵理子著 講談社 2007年  
1,470円

『裸でも生きる 2：私は歩き続ける』山口絵理子著 講談社 2009年 1,400円

[ブックガイド目次へ](#)